

# 盜難

宮本百合子

青空文庫



小さい妹の、激しい泣き声に目をさましたのは、彼れ此れもう六時であつた。

三時頃に一度お乳を遣つた丈だったので、空おっぱいをあずけたまま、先ぐお乳を作りに配膳室へ出て行つた。

寝間着のお引きずりのまま、二人が腫れぼつたい目にもう強過ぎる日光で、顔をしかめながらお湯を沸かしに台所へ出ると、中央の大テーブルの真中に妙なものが、のつかつて居る。

いつも、一番奥の部屋——私共の床のある所の隅に置いてある筈の桐の小箪笥が、すっかり搔き廻した様になつて居るのである。

三つとも引き出しは抜きっぱなしになつて、私共がふだん一寸拾つたボタンだの、ピン、小布などの屑同様のものを矢鱈につめこんであるのが、皆な引っぱり出されて、あかあかい日の中に紙屑籠を引つくり返した様になつて居る。

「まあどうしたんだろう、

誰が此那がらくたを引つくり返したんだろうね。

と云つて、小さい紅絹もみの布や貝ボタンをひねくりながら、若しかすると母が、夜中に気分

でも悪くして、薬をさがしたのじやあるまいかなどと思つて見た。けれど共、どうもそれにして妙である。

寝室にはスタンドがあるし、それで暗すぎるなら、食堂にだつて、その次の部屋にだつて、いくらでも電気がつくのに、何もわざわざ此那所までえつちらおつちら持ち出さないでもすむにきまつて居る。

小さいと云つてもかなり持ち重りのするものを、母が長い廊下を運んで来たと云う事は、どんなにしても考えられない事だ。

「ほんとに変だ、一体誰がこんな馬鹿をしたのかしらん。まあとにかくそうやつとおき、今に皆にきけば分るだろうから。

私はブツブツ云いながら乳を作つて持つて行こうとすると、もうさつきから裏の方を掃除して居た書生が、窓の所から大きな声で、

「一寸お嬢様、変です、早く来て御覧なさいまし早く。  
と叫んだ。

「何？ どうしたの。

「奥の用簾笥が、遊動円木の傍に出て、ごちやごちやになつて居ます。

と云う。

私はハツト思つた。

さてこそ、到頭入つたな？

頬かぶりで、出刃を手拭いで包んだ男が、頭の中を忍び足で通り過ぎた。

私は大いそぎで、まだカーテンが閉つて居る寝室の戸を、ガタガタ叩きながら、

「お母様！　お母様！　早くお起なすつて頂戴。

と云うと、もうさつきから起きて居たらしい母の顔が、すぐ出て來た。

私は自分でも氣の付いたほど、喫驚びつくりし、へどもどした顔をして、用箆箒の一件を報告した。

「そいじゃすぐ交番へお出つて。それから、皆なそのまんまにして置かなくつちやいけないよ、すぐ行くから。

その中に弟達が皆起き出して、面白半分に、

「泥棒が入つたんだつて？　どつから入つたの？　誰か見つけた？

「何故僕起さなかつたんだい。泥助の奴なんかすつとばしてやるのになあ。

「いつ入つたの？　僕の本持つてつちやわないと云うか。

などと口々に騒ぎ立てるので、家中はすっかり大騒動になつて仕舞つた。

私は、紺がすりの元禄袖の着物に赤い小帯をチヨコンとしめたまま、若し何処か戸じまりに粗漏な所があつて、其処からでも入られたとあつては、ほんとに余り気が知れていやだと思つて、故意と閉めたままになつて居る家の戸じまりを見て廻つた。

湯殿から水口から、どこの隅までもゆうべ鍵をかけた通りに釘がささり、棧が下りて、鼠のくぐつたあとさえもない。

それに足跡もなければ、どの部屋にも紛失物がないので、何が何だか分らない様な心持になつて仕舞つた。私の部屋の彼那ぼろ雨戸でさえちゃんとして居て、中に一杯ちらかつて居る紙屑も本も、玩具も、何一つとして位置さえ變つて居ない。

「入るにしても、余程巧者な泥助だ」と思いながら彼方此方歩いて居ると、じきに三十形怡の人によさそうな巡査が庭木戸の方から入つて來た。

家中の者は、此のたつた一人の「おまわりさん」が家の者を氣味悪がらせた泥棒の始末を付けて呉れるのかしらんと思いながら、ズラリと立ち並んで、第一の発見者である私が、最初の模様を細かに説明した。

「フフン、そうすると何ですな、矢張り外から入つたでしょう。何処か戸閉りを忘れた

所がありませんかしら。まあ一廻りしてから、お宅の中を一寸見せていただきましょう。少ししなえた様な服を着て、猪首の巡査は、何か云つては赤い顔をした。

疎な髪のある肉のブテブテした顔が、ポーッと赤くなり、東北音の東京弁で静かに話す様子は、巡査と云う音を聞いた丈で、子供の時分から私共の頭にこびり付いて居る、

「何ちゅうか、あ——ん

とそり返る概念を快く破つてくれた。

私はその巡査がすっかり気に入つた。

可愛い人だと思いながら、背を丸くして行く彼のお供をして行くと、成程、まだ新らしい用箆筈が滅茶滅茶になつて居る。

鍵がかかつて居るのを、無理に何か道具でこじあけたと見えて、金具はガタガタになり、桐の軟かい材には無残な抉り傷がついて居る。

これには、母がまだお嬢様だった時分、書いたものや、繡つたもの、また故皇太后陛下からの頂戴ものその他一寸した私共には何でもなく見える、髪飾りなどばかり入つて居たのだ。

地面にじかに投げ出されたものの中には、塩瀬の奇麗な紙入だの、歌稿などが、夜露に

しめつた様にペショペショになつてある。

「此那になつて居るのを見るのはほんとにいやだ事。一そ一思いに皆持つて行つて仕舞えば好いのに。

私は、醜い形にされた簾笥だの、泥になつた好い物などが、しづかくない形で散らかつて居るのを見ると、ほんとにいや——な心持になつた。

今頃は、どつかの屋根の下で、泥棒殿はニヤニヤして居るのだろうと思うと、此那にして大狼狽して居る自分達が、何だか変な心持もした。

「さあ一体どこから入つたんでしょうなあ。

一向跡がありませんなあ。

巡査は、毛虫だらけの雑木の中をくぐつて、垣根際まで行つたり、裏門の扉によじ登つたりして見た。

「このトタン塀はのぼれませんがね、

ちと此の門の方がくさい。

一体斯う云う風に横木を細かく打つた戸は、風流ではあるが、足がかりが出来ますから、どうしても用心にはよくないですなあ。

私共は、ガヤガヤ云いながら風呂場の前まで行くと、すぐ傍の、隣の地境に、歯抜けになつた小階子が掛つて居るのを見つけた。

「あ！ 階子！ 階子がありますよ。

これじゃもう此処から入つたとほか云えませんね。

皆は、杉の生垣に喰い込んで居る朽ちた様な階子を、触つたりガタガタ云わせたりした。けれ共、それは、何処のだか知つて居るものは誰も居なかつた。

「どこんでしようね、うちのは高い所に吊り上げてあるし、もつとずーっと長いしするから……

おとなりんじやあないでしようか。

「そちかもしれない、

あ、ほらね此処が此那に折れてるでしよう。

向うから此方へ階子を下して、此れを足がかりにして登つたんです。

巡査は、垣根際の桃の木をさした。

生れてこのかた、今まで泥棒と云うものに入られた事のなかつた私は、此那ことをして一々探索してあるく事が此上なく、面白かつた。

命に別状さえなく、彼那嫌な風付きにさえならないですむなら、たまには探偵も面白いだろうなどと思われた。

第一の入口は斯様にして分つたけれ共、どこから家の中に入つたかと云う事が疑問であつた。

水口の所にやや暫く立ちどまつて、しきりに戸を外から、押したり叩いたりして居た巡查は、急にさも満足したらしい、得意そうな声をあげて叫んだ。

「漸<sup>ようよ</sup>う分りました。此処からです。此処から入つたんです。

間違ひなく此処です。

そら、斯う鍵が掛つて居ますねそれを斯う分けましょう。そして、錠を突あげると何でもなく明いてしまう。奴等あ何と云つたつて、本職なんですからな。

それから彼は、靴を脱いで、台所中をすかしながら這い廻つた。

流し元と、女中部屋との間の板の間に、薄く泥のあとが付いて居るけれ共、それもぼんやりして何がどうだか分らないので、

「此処いらを余程行つたり来たりした様ですなあ。

と、血が集まつて、真赤になつた顔を苦しそうにあげた。

用簾笥のあつた奥の部屋へ行つて見ると、二棹並べて置いてあつた大簾笥の上の、こまかいものが皆下に下ろしてある。

彼那大きなものを持ち出し、此処でも之丈の事をしたのに、どうして家の者の目が覚めなかつたのか、

どこかに禁厭がしてないかとか、ゆうべ誰かが干物を外へ出して置いたまんまだつたのではないか。

斯うやつて考えて見ると、どうしても三時頃に私共が乳を作りに起きた時には、台所の電話室に居たのだろう。

若し、私でなくつても誰かが思いがけない出会い頭に声でも立てたらどんな事になるか。皆は、ほんとに誰一人目をさまさず声も聞かなかつた事を、此上なくよろこび合つた。

三面で見る様な、惨虐な場面が、どうしたはずみで起らないものでもなかつた。

まあこれぞと取られたものもなしするからほんとによかつたとは思つたけれ共、一番部屋の端に寝て居た自分は、きっと蚊帳を通して、自分の寝姿を見られた事は確かだと思うと、女性特有の或る本能的な恐怖は、強く浮き上つて来て、自分の眠つて居たと云う事は、将して、ほんとの自分の眠りであつたろうかなどと云う事さえ感じられて來た。

そして種々恐ろしい様子を想像して見れば見る丈、今斯うやつてきのうと同じに、歩き喋り考えて居られる自分が、又外の家中の者が、ほんとに仕合わせであつた様に思わずに居られなかつたのである。

巡查は間もなく帰つて行つた。

けれ共、段々彼方此方片附け出すと、泥足の跡のある着物だの、紙片れだのが発見された。

その中でも、最も皆を縮み上らせたのは、湯殿の化粧台のそばに落ちて居た一枚の「ぼろ」であつた。

うす黃い、疎な木綿の二尺ほどの布は、何か包んで居たらしく皺になつて、所々に金物の鏽が穢らしくついて居る。

何か金物を包んで来たのだと云う事は確かである。

皆の者は、そのうす汚れた布片れにくるんであつた、赤鏽のついた鉄棒か斧が、真暗の湯殿に立つて、若し誰でも来たらと身構えて居る男の背後にかくされてある様子を思うと、ほんとに背骨の一番とつぽ先が、痛痒い様な感じを起して来る。

若し自分でも、フト用足しに起きても仕て、彼那どこの馬の骨だか分りもしない奴の鏽

棒なんかで、グーンと張り倒されたなりにでもなつて仕舞つたら、どんなだつたろう。

さぞ私は美くしく、賢こく、好いお嬢様であつた様に云われる事だつたろうに。

美人と云われたけりや身投げしろと云われた下女の様な事を考えて居たのである。

家中は、畳の上まですっかり雑巾をかけられた。

風呂場の手拭では、どんな事をしたか知れたものでないと云うので、すっかり新らしいに掛け換えられ、急に呼ばれた大工は、「本職の奴等」につけ込まれない様にしまりをすっかりしなおした。

そして家中が、何だかザワザワした様子で午後になると、第一に母が頭の工合が大変悪いと云い出した。

それに続いて、私も何だか後頭部が重くて堪えられないと云うものが沢山出て来て、夜頃には家中の者が渋い顔をして、

「どうもこれはただじやない。

と云い合つた。

そこで一番気分の悪い母が医者へ電話をかけて泥棒の事をすっかり話してどうも魔睡剤を掛けられたのじやああるまいかと思うが、若しそうだつたらどうしましようと訊いた。

そうすると、電話口でお医者さんは大笑いをして云つたそうである。

「そいじゃあ奥さん、

よく御不事に生きて被居つしやいましたねえ。

兎に角皆が気分が悪かつた。

そして今夜は誰か起きて居なけりやあいけないと云う事になつたけれど共どれもどれも気が向かない。

まして女中などを起して置いたつて、自分の方からぶつかつても魔睡剤に掛つて仕舞つて、泥棒が「此処をあけろあけろ」と怒鳴りでもすると、

「いらっしゃいまし。

と云つて開けて遣りそุดと云うので、結局夜光りの朝寝坊の私が夜番をする事になつた。

「ああいいともいいとも私が居りや泥棒だつて敬遠して仕舞うさ。

などと云いながら、少し夜が更けると、皆の暑がるものかまわず、すつかり戸を閉めて、ガラス戸にはカーテンをすきまない様に引いた。

そして、そこいら中に燈をカンカンつけた中に、小さい鐘を引きつけて、私は大変強そうに、自信あるらしい様子をして夜番を始めた。

勿論、すぐ傍には両親の寝室があり、向うの方では書生がちゃんと起きて居るのだから決して私一人なのじやない。

けれ共私は強くなくちやあならんと思つた。

勿論強いんだろうとは思うけれ共、大抵の時には、いつもこわい事の済んで仕舞つた頃漸々強さが出て来るので、一度だつて強いと思われた事がない。

自分でもどうだかよく分らない。

けれ共、とにかく私はいつも自分の部屋でする通りに気を落着け心を集めて読み書きを仕様とした。

一時過ぎになるまでは至極すべてが工合よくなつた。ところが、フトどうかした拍子に、大窓のカーテンの隅が三寸ばかり、明いて居るのを見つけてからは、私はすっかり神経質になり、強さが引っ込みかかつた様な様子になつて仕舞つたのである。

地面から三四尺ほか上つて居ない所にあるそれ丈の隙間は、明るい部屋の中をのぞくに充分である。

私は何だかそこが気になつた。

どうやら眼玉がギラついて居そうでやり切れない。そこで私は、目をつぶる様にしてぴ

つたりと其処を押えつけて、本を重しにかつて置いた。

けれ共、間もなく振返つて見ると、パクーンと又口を開いて居る。

これではどうもたまらない。

私の強さは、もうちよんびりばつちほか残つて居ない様な、情ない有様になつて来る。

燈を消そうかとも思わないではなかつたけれ共、うす暗い部屋の中に、ポツネンと滅り込みそうになつて居なければならぬ事を思うと、又それもいやである。暫くの間、カーテンの隙間ばかりを気にして居た私は、じいつとして居るよりは、まだましだと家中のしまりを見廻り出した。

しつかりしまつて居る戸まで、泥棒はきつと斯んな手付きでやるのだろうと思つて、わざわざこじつて見たり引つぱつて見たりした。

そして、そうやつても動かなければ私は安心したけれ共、少しでも隙が出来たり何かするど、弟共の机を持つて来てけつまづきそうな所に置いて見たり、箒をよせかけて、泥棒が戸を破つてソロソロと頭を出すと、いきなり箒の柄がバターンと倒れて来て、いやと云う程横面を張り倒す様子を想像して、独りでホクホクして居た。

水口には、大バケツだの盥だのがウジヤウジヤと積んである。

湯殿の口には小さい妹の行水盥に水を一杯張つたのが、縦横に張り板をのせて据えて居る。

家中の、凡そ口と云う口には皆、異様な番人が長くなつたり尖つたりして置いてあつたのである。

私はこれなら大丈夫だと思つた。

とにかく、今夜だけは大丈夫に違ひないと安心した。まして、朝来た巡査は、今夜は御宅の周囲を注意して置きますと云つて呉れた事を思い出してからは、益々心丈夫にならぬい訳には行かなかつたのである。

こうやつて立つて行く四時まではどんなに、のろくさと、変な心持であつた事か。

私は漸う世界が明るくなつて来るまでは、若し泥棒がだんびらを下げてヌツと立ちはだかつたら、どんな風に落付いてやろうか。

ちよくちよく新聞に出るよその偉いお嬢さんや奥さんの様に、お茶を出しあ菓子を出したあげく、御説法をして、お金をちよんびりやつて帰す様な事が出来でもしたら、それこそ剛儀なものだ。

けれども、うつかり私がそんな真似でも仕様ものなら、お茶碗は茶口の上で跳ね廻るだろ

うし、お菓子なんて何を喰わせるか知れたものではない。  
それよりも一素、矢張り私一流の狸をかまえるのが、一番巧いだろうと云う事を、  
しきりに考えつづけて居たのである。

## 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第一十九巻」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

1986（昭和61）年3月20日第5刷

初出：「宮本百合子全集 第一十九巻」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2009年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作成されました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆様です。

# 盜難

## 宮本百合子

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>